

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「また私の部屋に入ったでしょ」

「私も天にかぶりつきながら、私は父をにらんでみせた。」

「あん？ 入ってないよ。入る権利はあるけどね」

父は、くたつとした海老天をつまみ上げて、首を傾げた。まずそうだなっという顔だ。

今日の炊事当番は私。天文部の部活が長引いちやつて……というのは言いわけで、手ぬき料理はいつものこと。スーパーで買った天ぷら盛り合わせに、一応手作りのお吸い物。

「だって、ワンピースのリボン結んであったよ。お父さんでしょ」

父は口をもぐもぐさせながら、首を横にふり続けた。

「ばあちゃんかな」

兄が言う。父の首の動きが止まった。

「そうだ。つけ物を届けるって電話があったんだ。春樹、冷蔵庫見てくれ」

母方の祖母は、時々手作りの食べ物を持って千葉からやって来る。家の鍵を渡してあるのは、好きな時に来て、たまには泊まっていいよということなのに、えんりよしているのか、物だけ置いて帰ってしまう。

ワンピースというのは、母が春や秋に着ていたお気に入りの一枚で、今は私の部屋に掛けてある。うすい黄色地にオレンジと朱色の小花柄で、えりとそで口には小ぶりのフリル。前開きのボタン止めで、腰では共布の細いリボンを前で結ぶようになってる。いつもはほどいて外らしておくリボンが、さっき見たら結んであった。父かと思ったら祖母だったのか。

母は私が五年生、兄が中一の夏に交通事故で逝ってしまった。三年たった今でも、家に帰ると母がいるんじゃないかと思うことがある。

「ひがんでないよ。事実だもん」

なかなか減らない天ぷらの皿から、私は獅子唐をつまんだ。この苦さ、けっこう好きだ。

母は、いつもふんわりとしたスカートをはいて、クセのある長い髪の毛を一本のゆるい三つ編みに編んでいた。外に出かけるより家にいるほうが多かった。

「冬美ちゃんのお母さんってさ、雰囲気あるよね」

「おやつが毎日手作りなんて、いいなあ」

家に来た友だちは、決まって母と母の作るお菓子のファンになった。

「私は、たまには売ってるお菓子が食べたいけどね」

私と兄は、お菓子を買ってもらったことがない。母は私や兄がほしがればたいていのお菓子は作ってくれたし、そのどれもがおいしかった。でも、駅前の店で人気ナンバーワンのケーキとか、テレビコマーシャルで流れるお菓子とか、みんなが話題にしている物を、私は食べてみたかったのだ。もちろん、お小遣いをもらうようになったら、

お菓子だけでなく、母はレトルトや冷凍食品、出来合いのお惣菜も使わず、新鮮な材料や乾物だけで料理した。母が亡くなって、今私たちは交代で炊事当番をしているが、母が見たらショックを受けそうな食生活だ。

「お母さんは安全な物だけで、お前たちを育ててくれたのにな。お父さんには無理だな。ごめん」

父は自分が炊事当番になるといつもそう言いながら、冷凍ぎょうざを焼いたり、買ってきたお惣菜を並べたりする。手作りというのは、口で言うほどたやすくはない。母はすごい人だったと、今になって思う。

実は、あのワンピースも母の手作りだ。

父のツウキン着以外、家族の服は

2 母の手製で、カーテンやクツ

シヨンカバー、時には布団まで作った。殺風景なノートの表紙に端切れをはって

クリーニング屋さんがこのワンピースを届けに来たのは、母が亡くなってひと月くらいたった時だった。

「仕上がり日に必ず取りに見えるんだけど、あんまり見えないから。お母さん、ご病気か何か？」

でつぷりと太った気の良さそうなおじさんにきかれ、一人で留守番していた私は、だまって首をふった。何か言うかと泣いてしまいたいそうだった。

「このシミもちゃんと取れましたって、お母さんに伝えたいね」

私はだまって頭を下げた。おじさんはキャップのつばをちよつと持ち上げ、出て行った。

ハンガーのくるんとしたところをにぎり、引きずらないように手を高く上げながら運んだ。そして、自分の部屋の壁にあるフックに掛け、ビニールのカバーをぴりぴりとはがした。

あ、このワンピース……いつか家族でデパートに行った時に着ていた。去年の参観日にも着て来たよね。

壁からはなれて見ると、母がそこにいたようだった。それからずっと、母はそこにいる。今では地球儀や望遠鏡やパソコンが幅をきかせるこの部屋で、そこだけちがった世界を作っている。

「おー、うまい」

父と兄は、天ぷらやお吸い物はそっちのけで、祖母のつけ物をおかずにご飯を食べていた。

「ばあちゃんの料理上手はお母さん似だね。あ、逆か」

兄が笑った。

「はいはい。うちの料理上手は、おばあちゃんからお母さん、そして春ちゃんにイデんしたんでしょ」

私は料理が下手。ドをつけてもいい。

「冬ちゃん、ひがむなよ」

母が作る私の服と言えば、フリルやレースを品良く使い、リボンやコサージュなどの飾りが必ずついていて、たいていの女の子が好きになるデザインだった。体育がすんで着がえる時、友だちにお願ひされて放課後まで服を交換したことがある。同じような服を作ってくれないかと、親御さんが母を訪ねて来たこともあった。何でも上手に作れる母が、私はとてもほこらしかった。それなのに、母の作る服をそれほど好きではなかったし、

3 ……嫌いになつていった。

本を読んだりピアノをひいたりするよりも、体を動かすのが好きだった私は、五年生になつても馬跳びやおしくらまんじゅう、鉄棒や登り棒で遊んだ。そうすると、服についた飾りが

4 取れたし、

「冬ちゃんって、運動好きなのにどうしていつもスカートなの？」

取れたリボンやコサージュ、すそのレースをつけ直しながら、母はため息をついた。

「元気なのもいいけど、もう少し静かな遊びもしたら」

いつものセリフだ。

「どうして？」

私もいつものように返す。

「どうして……」

苦笑いの母がここで口をつぐむのも、いつものこと。でも、ある時母は先を続けた。

「そりゃあ冬美は女の子だからよ」

「女の子は、静かにしないとだめなの？」

私が母の顔をのぞきこむと、針を持つ手を動かしながら、

ム生地のコサージュ。

「そういうわけじゃないけど……」
と母は声を低めた。

「そんな飾り、もういらぬ」

何度そう言おうと思つたかしのれない。でも、母がしてくれることをいらぬと言ふ勇氣が私にはなかった。いつも家族のために台所に立ち続け、夜遅くまでミシンに向かっている母を知っていたからだ。でも、大きくふくらんだ思ひは、おさえればおさえるほど、⁽³⁾あらぬ方向に飛び出して行く。

夏が始まる頃、私は母が用意したブラウスとスカートではなく、体育用のシャツとジャージズボンで登校した。

飾りが取れる心配もなく遊び回った私は、すがすがしい気分になる……はずだった。それなのに、玄関で見送る母の悲しそうな顔が、その日何度も頭にうかんだ。とてもひどいことをしたような気がした。⁽⁴⁾こんなやり方じゃなくて、ちゃんと言葉で伝えないといけない。

私はセリフを考えながら帰った。

（お母さん、お店で売っているさつぱりした服が、ほしいんだ。スカートじゃなくて、ジーパンとかチノパンとか、ズボンがいいな……）

玄関を入ると、焼き菓子の甘い香りにまじって、大豆の煮えるにおいがした。台所のテーブルに、焼き上がったマドレーヌが並んでいる。

「ただいま」

「あ、おかえり。冬美、それ買ってきたのよ、どうかしら」

手に持った菜箸で母がさしたイスの背に、ジーパンがかかっていた。

やった！ と飛び上がったのもつかの間、お尻のポケットに見なれた形のデニ

「これ、なくてもいいんだけど……」
ずつと言えなかった言葉が、その時はすつと出た。その興奮のせい、私はその花を強く引っぱり、それはたやすく切れて落ちた。

「あ……」

断つてから、ハサミで切るつもりだったのに。

「いいのよ、仮留めだから。やつぱり何も無いほうが、ジーパンらしくていいわね」

母は笑顔を作りながら、コサージュを拾ってエプロンのポケットに入れた。そして、

「煮えたかしらね」

と、なべの大豆を見に行った。

私はジーパンを持ったまま母の後ろ姿を見ていた。母がこつちを向いてにっこりしてくれるのを待った。でも母は、私が台所を出るまでこつちを向いてくれなかった。

私はこの日、⁽⁷⁾それまで母と二人でそうと運んでいた何かから、手を放した。

まもなく母が亡くなると知っていたら、放さなかったのに。私が手を放さなければ、母は今もここに居るんじゃないかと思う。

壁のワンピースを見るたびに、あの頃のことを思い出し、私の胸はぎゅつとなる。それでも私はあれからジーパンばかりはいている。藍色の丈夫な筒に足を通すと、気持ちが落ち着くからだ。

（中略）

冬美は最近同学年の今井君のことが気になっている。

その今井君と映画に行くことになり、冬美は気が動転している。

兄だけは、母のやり方にどんどん近づいている。

「今夜は鶏と根菜の煮物と、茶わん蒸し、な」

そんなめんどうな物——と言いかけた私に兄が見せたのは、レンジでチンするだけのカップ入りだった。

「へえ。春ちゃんはその伝統を守らなと思ってた。インスタントはバツっていう」

母のエプロンを腰から下だけ掛けて野菜を洗いながら、

「うーん、おれはお母さんのようには、無理」

と兄は言った。

「まあ、ちよつとやりすぎだったよね、お母さんって」

自分の言葉が意地悪くひびいた。兄がちらつとこつちをふり返り、私は顔をそらして茶わん蒸しを手を取った。

「はあちゃんってさ……」

流しに向いたまま兄が言った。

「まったく料理とかしない人だったんだって」

だれの話をしているのか、私は最初わからなかった。

「お母さんが子どもの頃、ばあちゃんは仕事を持っていて、けつこう、バリバリ働いてたみたい。残業も多くて、手料理とはほとんど無縁だったらしいよ」

「へえ……信じられない。あのおばあちゃんが」

千葉の家で食べた数々の手料理が目にかぶ。

「だよな。ばあちゃんが料理するようになったのは、定年退職した後で、ここ二十年くらいなんだって。こないだお父さんにきいた」

「じゃあお母さんは、自分が子どもの頃にしてもらえなかったことを、わたしにしようとしたのかな？」

「さあ……。それもあろうけど、あの人は、自分でいろいろ作るのが好きだったんじゃないかな」

私は道をまちがえながら家に着いた。部屋の畳に大の字になって、眠りこけて

見た夢の中で、今井君と歩いている私は、いつものTシャツにジーパン姿じゃなかった。もつとふわつとした服を着て、やわらかな雰囲気だったのだ。

ふわってどんな服？ スカート？ ……持っていない。

ポケットから引っぱり出した財布には、しわくちゃの千円札が一枚と小銭がちやりちやり。これじゃ、新しい方のジーパンで行くしかないか。

ごろんと横向きになった時、壁のワンピースが目に入った。そういえば、大人の母の物なのに、もうそれほど大きく見えない。私は母の身長をとうに追い越したのかもしれない。生きていたら、「あらいやだ、追い越されちゃったわね」って母は喜んだらう。

制服をぬぎ、ワンピースの前ボタンをはずして脚を入れた。そでを通し、ボタンを留め、リボンを結んだ。胸のあたりに余裕があるが、肩幅や丈はちょうどいい。

両親の部屋に走って姿見の前に立った。鏡の中には、まだ子ども顔をした母がいた。いや、背のびした私だ。でも、あんなにいやだった飾り——えりやそで口のフリルも、腰のリボンも、思っていたよりずっとずつと私の顔や体になじんでいた。

「何やってんの」

鏡のすみに、スーパリーの袋をさげた兄が映った。

「別に……」

「それって、壁に掛けてる、あれ？」

「うん……」

兄はしばらく私を見ていた。

「ま、たまにはいいんじゃない」

鼻歌まじりで台所に行き、なれた手つきで夕飯のしたくを始めた。料理好きの

たしかに、母は何かを作っている時が、一番楽しそうだった。そして出来上がった服を私に着せる時、とてもうれしそうだった。

十月の第一日曜日、母のワンピースを着て家を出た。

「冬美……」

ろうかでゼツクする父に、私はすその左右をつまみ、片足を後ろに引く社交界ポーズであいさつした。

「お父様、行ってまいります」

父が何か言う前に、玄関を飛び出した。制服のスカートと違って、生地が軽いせいか、とても落ち着かない。ふわふわした気もちで駅前いちょうの銀杏の木の下に着くと、ちょうど今井君がカイサツから出て来た。いつもと変わらない笑顔を見て、私はようやくよく落ち着いた。

「おつす」

「おはよ」

近づいた今井君は、驚おどろき顔になった。

「へえ、そういうのも着るんだ」

「へ、変かな」

やっぱり、母の大人用のワンピースなんて、私には早いだろうか。すると、

「全然。なんか、お姫様みたい」

と今井君は照れもせずと言った。

「え……？」

言葉が見つからずにいる私に、

「あ、かわいいうつことだけど」

と今井君は頭をかいた。

お姫様とか、かわいいとか、それは私があの日手放した母の世界の言葉だった。⁹いやな気がしないのはなぜだろう。

さい。

問七 — 線(5)「ずっと言えなかった言葉が、その時はすつと出た」のは、「私」の心理状態がどのように変化したからだと考えられますか。自分のことばで説明しなさい。

問八 — 線(6)「母は、私が台所を出るまでこつちを向いてくれなかった」とありますが、この一文にはどのようなことが表現されていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私への愛情がふみにじられたことに対する母の怒りがずっと続いていること。

イ 食事の準備をしている母が気持ちを切りかえ料理に集中しようとしていること。

ウ ジーパンを買っても結局少しも変わらない母に対して私が激しく怒っていること。

エ 母がどのようなことをしてくれようとも、私が自分の主張を貫き通そうとしていること。

オ 私がひどいことを言ってしまったことを許してほしいと思っていること。

問九 — 線(7)「それまで母と二人でそうつと運んでいた何か」をあらわす五字以内のことばをこれより後の文中からさがしてぬき出しなさい。

問十 — 線(8)「ばあちゃんってさ……」から始まることばにこめられた兄の気持ちの説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア おばあちゃんが手料理を作っていなかったことを話し、自分のインスタント料理も認めてもらおうとしている。

イ 子どもの頃にしてもらえなかったことをしていた母の話をし、してもらえていたことのあることがたさを述べている。

ウ 好きでいろいろなものを作っていたお母さんのことを話し、母への

「映画館、あつちだけど」

先に歩き出した今井君がふり返った。

「うん、知ってる！」

私は今井君を追い越して走った。今井君が何か言いながら追いかけてくる。乾いた秋風と一緒に、ワンピースのすそが元気にゆれた。

(庭野 零、「母のワンピース」にもとづく)

問一 — 線①〜⑤のかたかなを漢字に直しなさい。

問二 — 線(1)「父の首の動きが止まった」とありますが、ここで「首の動きが止まった」のはなぜですか。その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 娘の部屋のワンピースが思い浮かんだから。

イ 今食べている天ぷらに使われている材料を想像したから。

ウ 記憶にある冷蔵庫の内部の様子が思い浮かんだから。

エ 義理の母からの電話を受けた時の場面が思い出されたから。

オ 息子がいつも祖母のことを話す時の記憶がよみがえったから。

問三 — 線(2)「幅をきかせる」とはどういう意味ですか、答えなさい。

問四 — 1 () 4 () に入ることばとして最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しよつちゅう イ だんだん ウ こつそり エ ほとんど

問五 — 線(3)「あらぬ方向」とありますが、「あらぬ」のことばの意味を八字以内の自分のことばで答えなさい。

問六 — 線(4)「こんなやり方」とありますが、「こんな」と表現したのはどのような気持ちからですか、「」気持ち」に続くように三十字以内で答えなさい。

屈折くせつした心を持つ妹の気持ちを楽にしようとしている。

エ 子どもの頃にしてもらえなかったことをしていた母の話をし、やりすぎになるのは当たり前だったと理解を求めている。

問十一 — 線(9)「いやな気がしないのはなぜだろう」とありますが、この時の私の気持ちとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 時と場合によっては母と同じようにすることも悪くはないと思えた。

イ 自分の中に確実に母の世界と同じものがあることに気づいた。

ウ 今井君のことが気に入っているので、言われ慣れないことを言われなくてもうれしかった。

エ 今日自分にとって特別な日なので、気分もいつもとはちがいうきうきしていた。

問十二 — 線A「藍色の丈夫な筒」、B「ワンピースのすそ」とありますが、これらは「私」の気持ちを、比喩表現を使って対比的に表したものです。どのように対比されていますか。説明しなさい。

線Aは「私」の気持ちを、線Bは「私」の気持ちを、比喩表現を使って対比的に表したものです。どのように対比されていますか。説明しなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1) 見えない季節

牟礼慶子

できるなら

日々のくらさを 土の中のくらさに

似せてはいけないうでしようか

地上は今

(2) ひどく形而上学的な季節

花も紅葉もぬぎすてた

風景の枯淡をよしとする思想もありませんが

ともあれ くらい土の中では

やがて来る華麗な祝祭のために

数かぎりないものたちが生きているのです

その上人間の知恵は

触れればくずれるチューリップの青い芽を

まだ見えないうちにさえ

春だとも未来だともよぶことができるのです

——詩集『魂の領分』

青春は美しいというのは、そこを通りすぎて、ふりかえったときに言えることで、青春のさなかは大変苦しく暗いものだとおもいます。大海でたった一人もがいているような。さまざま可能性がひしめきあつて、どれが本当の自分なのかわからないし、海のものとも山のものともわからないし、からだのほうは盲目的に発達してゆくし、心のほうはそれに追いつけず我ながら幼稚っぽいしで。ありあまる活力と意気消沈とがせめぎあつて、生涯で一番ドラマチックな季節です。自分をつかむという、難事業中の難事業の とつばなですから途方にくれるの

風景の枯淡をよしとする思想もありますが

は、むずかしい行ですが、『新古今和歌集』(巻第四、秋歌)の藤原定家の、

み渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ

をふまえていて、白黒のモノトーンの世界、枯れ枯れの侘びしさを長くめでてきた日本の美学への批判を示しています。【C】もっと豊饒なもの、た

わわな色彩、躍動的なものを準備し用意しているものへの期待をあらわにしています。

牟礼慶子は中学校の国語の先生を長くしましたから、自分自身の内部の暗さ、生徒たちがかかえている暗さとともに敏感に感じとり、暗さがはらんでいる未来に、そっと手を添えているようなところがあつて惹かれます。自分をつかみ直そうとする勇氣ある人は、おとなになつてからも何度でも、こういう暗さに耐えることを 辞しません。

(茨木のり子『詩のこころを読む』より)

注 ※1 とつばな……物事の最初の段階

※2 聰明……理解力・判断力にすぐれていて賢いこと

※3 予兆……何かが起こることを予感させる前ぶれ

※4 豊饒……豊かなこと

※5 辞しません……ためらわずにします

問一 【A】【C】に入ることばとして最も適切なものを次

の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア では イ そして ウ そこで エ つまり オ でも カ または

も無理からぬこと。どんな時代にも、青春期にハンドルを切りそこなう人が多いのは、たしかに危険なカーブ、なかなかの難所であることがわかります。

見ていると、十代の後半までには、はつきり自分をつかむことのできる人がいます。【A】自分の時間を何に一生捧げて悔いないか、自分の素質を早い時期に見定めることのできた人で、聰明という言葉はこういう場合にこそびつたりだと思えるくらい。【B】たいていは、長い模索とあちらにぶつかり

こちらにぶつかりながら自分をつかみとってゆくのがふつうで、それはこの詩に書かれているように、

できるなら

日々のくらさを 土の中のくらさに

似せてはいけないうでしようか

という、つぶやきとも悲鳴とも忍耐ともつかない内的独白をかかえて、苦闘することになります。

冬の大地はのつべらぼうですが、春になるといつせいに芽が出て、播いた種でもないものまで現われて、雑草もぐんぐん。それなのに待っていた芽はあらわれなかつたりして。冬の間、土の中でいったいどんなドラマが進行していたのか、草木や花をみてからやつとわかつたりします。開花したもの、ついに枯れてしまったもの。だとすれば人の心も、霜柱が立ったり氷つたりの泣きたいようなさむざむしいなかでこそ、どんな種子を育てているかわかつたものではありません。作者は地上のみえる世界よりむしろ、地下の世界でひしめいている暗さ、豊かさへの予兆のほうに信頼をおいています。

地上は今

ひどく形而上学的な季節

花も紅葉もぬぎすてた

問二 —線(1)「できるなら……似せてはいけないうでしようか」という牟礼慶子の願いを筆者はどのようなものだととらえていますか。詩のあとに続く同じページの本文の中から一文でさがし、最初と最後の五字を答えなさい。

問三 —線(2)「形而上学的な季節」とありますが、ここでは具体的にはどのような様子を表現していますか。詩のあとに続く同じページの本文の中から、その様子を表現している部分を十字前後でぬき出しなさい。

問四 —線(3)「花も紅葉もぬぎすてた風景の枯淡をよしとする思想」と同じ内容を示している部分を本文中から三十五字以内でさがし、最初と最後の五字を答えなさい。

問五 —線(4)「華麗な祝祭」とは、春になりいつせいに草木が芽ぶき、花が咲く様子のことですが、牟礼慶子はこのことばをどのようなことの比喩として使っていますか。説明しなさい。

問六 —線(5)「人間の知恵は……よぶことができる」とありますが、それはどのようなことを表していますか。次の中から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、花が開花するのを見たいので早く春を迎えたいと思つてい

イ 人間は、青春の苦しさや暗さをこれからの可能性としてとらえられ

ウ 人間は、青春のせめぎあう心を冷静にさせる手段を持つていているとい

エ 人間は、春に咲く花の開花時期をずらす技術を持つていているとい

問七 —線(6)「たわわな」のこころの意味を、自分のことばで答えなさい。

問八 —線(7)「自分をつかみ直そうとする」とありますが、「自分をつかむ」とはどのようなことですか。説明しなさい。

